

GR
白雲郷

とりお



41

昭和53年1月1日

宗教法人
白雲山鳥居観音

表紙の説明

白雲山 鳥居観音境内花園

梅からさくら、特につつじの満開ともなれば遊歩道をいく人の顔も花の色に染まるかと思われる程です。

数万本のつつじ、其の他春の花が咲き乱れて一大絵巻となります。

とりゐ第41号目次

表紙	白雲山の花園の一部	
新年を迎えるに当って	平沼桐江	一
賀正	尾尻天外	二
道光禪師御法話(其二十三)		三
平沼桐江先生の延命十句観音経	松田江畔	六
西遊	記(其三十五) 岡部千三	十一
田舎医者(其二十一)	見川鯛山	十四
新年互禮		十七
鳥居観音だより		十九
裏表紙	鳥居観音案内図	
春の行事案内		



新年を迎えるに当って

平 沼 桐 江 八十七翁

新年おめでとうございます。四方有縁の皆様益々ご健勝にて新春をお迎えになりましたことと心よりお喜び申し上げます。

お蔭をもちまして、私本年八十七才を迎えることができました。

これも只々観世音菩薩のご加護のお蔭と毎日ばかり白雲山の方向にむかって、合掌をいたします。

そして月に一、二回は白雲山へ参拝し、読経焼香いたし、山内の清浄な氣にふれながら、玄奘三蔵塔を始め、救世大観音、地球愛護平和観音へと順々に参拝します。

その場、その時、強く靈感にふれるというのでしょうか、……身心共に何ともいえない力を感じるようになってきました。

鳥居観音四十年の寺歴の積み重ねは年と共に厚くなってきました。

昨年大鐘楼の落慶を最後に、各種の建物は整ったわけがあります。

道路も建物を結んでいる遊歩道、車道によって、その場その場から眺めることができそうですので、その趣もいろいろ変化します。

昨秋開眼された、救世大観音堂宇内の三十三観音は、私の最後の製作となりましたが、一堂に安置された、三十三観音を拝せば、所々の霊場をめぐったことになるかと思えます。

本年も春は梅から、四月のつつじ、秋は無二の紅葉が皆様をおまちするでしょう。

何卒本年もよろしくお願い申し上げます。合掌

賀 正

鳥居観音侍僧

尾 尻 天 外

新年お目出とうございます。

みなさまには、ご機嫌よろしゅう、ご迎春のことと存じます。

何回迎えても、新しい年、お正月を迎えた清々しさは格別です。

大人になると、まして齢をとると子供の頃のようににはしやいでもおれないと申しながら、神仏に感謝し、お祈りをささげ、屠蘇を祝うなど、なんとという敬虔な習わしでしょう。

そしてお雑煮をいただける団欒など、先祖さまはほんとうに素晴らしいものを私共に遺して下さいました。ありがたいこととございます。

一月一日は三元と謂い、年の元、月の元、日の元ものの基い、はたらきの始めをあらわし、清新無垢福寿無量の吉祥の佳日とされます。

この無量の福寿にあやかり護られて、この一年がしやわせ多い年でございますよう、お祈り申し上げます。

物満ちながら末法の世と嘆かれることでもありませんが、道元禪師さまの「一日の寿命は尊ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり、此の行持を行取せば、諸仏の大道に通達するなり」と明らかにお諭し下さっておられますことを心に銘じ、日日是れ好日と至心に精進いたしたいものでございます。

どうぞ本年も一層のご教導が戴けますようよろしくお願い申し上げます。

尚私、このお正月で丁度一年のご奉任になりましたが、みなさまから過分のご愛顧をいただきましたことを併せて厚く御礼申しあげます。

昭和五十三年元旦

侍 僧 尾 尻 天 外 合 掌



(其の二十三)

禪の宗意から仏教を話す 前号につづく

菩提樹の大きなのは日本の楠の木のように枝がはびこっています。一般には畢婆羅樹ひびらじゆといいますが、それを菩提樹というのは、仏教から取入した名であります。それは釈尊が悟りをおひらきになったところが、印度のマカダ国の仏陀伽耶というところであり、その仏陀伽耶の成道記念の大塔のうしろに、その菩提樹が今もはびこっています。仏蹟を巡礼するものは、記念にその葉の落ちているのを、いただいできますが、私もおまいりしたとき堂番にたのんでもらってききましたが、それを菩提樹といつてあがめるのは、この木の下で釈尊が坐禅をして、十二月八日の暁に明星の光を縁として、悟りをひらき、正覚

を成就いたされた、その釈尊のおさとりになった道を菩提道といいますので、釈尊がその木の下で菩提道をおさとりになったのを記念して菩提樹と尊んでいるわけであります。

いまの神秀禪師が「身は菩提樹」といわれたのはおたがいは大自覚をすれば みな仏になれる身分であるということをおわられたのであります。

そのつぎのことばに、

「心は明鏡台のごとし」といってあります。これはわれわれの心の美しく、浄明なることは、婦人の顔をうつす鏡が、一点の雲りもなく、台きよにのせられ光っている如くであるということでもあります。その後の二句は、そういうように美しいものではあるが放任をし、ゆだんをしていると、塵がかかって鏡がくもるように、人々の美しい仏心も、いわゆる「妄心」という凡夫根性の塵埃に、くもらされるから、たえず修養につとめなければならぬことが教えてあります。このようにして清き心の姿に目ざめ、清き心の力で動き、清い心の光に照らされて、人生に

足ふみのできる必要であります。この神秀禪師の語でみても、いかにわれわれの心体は明るい、清らかなものかわかりましょう。それで、沢水和尚の法語に、

「およそ心あるものは、心の養いなるべからず」とあります。

人は、肉体をもっているから、肉体の養いを知っています。牛乳をのむとか、玉子をたべるとか、風邪をひかないようにとか、寒い暑いにつけても、用心をするといったように、みな肉体のやしないには工夫をしています。それならば、おたがいが持っている心をやしなう工夫もなくてはなりません。そしてそれは肉体のやしないと同時に、今日を措いてはならないのであります。

ところが、今日の社会でやかましいことは、生活の問題であります。しかし、それは、ただ肉体生活の問題であります。「食っていけないが、どうするか」、裸でおれんが、どうするか」ということで、肉体生活をあせっていくのであります。なるほど、

それは当然の問題ではありますが、人は肉体生活だけ満足すればよいというわけのものではありません。私も宗教的な立場からいえば、肉体生活と同時に、精神生活も求めていかなければならない問題であります。あるいは、むしろ精神生活の方を先に求めていく必要があると思います。形は心の影、ことばは心のひびきと云って、肉体と精神には自ら本末があります。肉体は末で、精神はもとであります。してみれば、まず精神から修養することが順序でなければなりません。世の中としては、肉体生活がもちろん、緊急な問題として、処置されていかなければなりません。少なくともそれと同時に、精神生活の方も工夫していかなければならないのです。

そこで沢水法語に「およそ心あるものは、心の養いなるべからず」といわれたのであります。それならば、その心のやしないは、どうしたらよいのでしょうか。それをいうと、たいがい、なるほど精神修養も必要だが、われわれのように今日生きていくのにも、まず食うことに困る者がそんなことまで余

力はない、まあ……もう少し働いて、少しひまの身にでもなったら……という人が多いのですが、そんなものではありません。この肉体の存在が、一日もゆるがせにできないように、精神をやしなう工夫も、また一日もさしおいてはなりません。このことをつぎに、政治家は政治に工夫をなせ、農家は農に工夫をなせ、といてあります。おのおのの仕事をしながら、心をやしなう工夫を忘れてはならないということ、各自がその職にありながら、かつなすべきは仏法の信念なりと申しているのであります。

そのつぎに、「信心とは、まことの心と書けり、まこととなりて、悪しというは一人もあるべからず」と申してあります。ご承知のように、信心の信の字は、信用組合の信の字であります。

たとえば、いままで非道をおこなっていた不良のものが改心して、「これからは真人間になっていきたいと思います。なにぶん、よろしくおたのみ申します」といつてきたならば、それがまことからであれば、だれも異議をいうものはない筈であります。

ところが、信ということも、みな口軽くいいますが、これには深し、浅しのあるもので、いま、仏教ことに禅的には信心というのは「真心」すなわち心の底の仏心にかえることであります。神仏を向こうに見て拝むこと、それも、もちろん信心であります。いま、禅宗の立場からいいますと、人々自身が持っているところの、仏ともなり、神ともなりうる浄き本心の仏性に目醒めること、これがすなわち信心であります。前にも申したように、「み仏の教えの道はとにかくに、清き心に、なれとこそあれ」であります。ですから人々本具の心の本姿にかえること、それが今いうところの信心であります。この意味で、寺の本堂や、お宮について拝むのは信心の手ならいです。神の前、仏の前にぬかづくときの、清く正しき心持この心を、たとえその場をはなれても、神仏を一心におがむときと同じようなころもちで、生きていけるようになることが肝要であります。それが信心相続といい、そこから信仰生活が実現するのです。

(以下次号)

平沼桐江先生の延命十句観音経と達磨

松田江畔

私が初めて桐江先生御夫妻にお目にかかったのはもう三十年も前の事になった。日月の経過の早いのは、全く驚く外はない。水野梅暁老師の導きによつて、初めて名栗の平沼家を訪ずれた時、既に半ば完成した最初の一体、仁王像があった。粗い鑿痕ではあるが、その気魄は四海を睥睨するほどのものであつて、私はこのままで完成としてもよいのではないかと思つた。

先生は当時五十五六才で、人間として最も油ののつた時であつたと今は思う。だがその時は私の親父ぐらいに思え、奥様は五十才も少しお若かつたらうに、母の様に思えた。坊主頭に頭陀袋ならぬ軍隊復員姿の鞆袋を肩から掛けた、貧相な私をごらんになつて、御夫妻ともどうお感じになつたか、一度お伺ひしてみたいものだと思う。

而し梅暁老師は、私を高く評価してくれて、先生御夫妻に対し、これは掘り出し物だよ、という意味の言葉で紹介された。私は老師の書生でよいし、小間使い程度でもよいと思つていた。

それは何故かというと、老師と数回接しているうちに、その雄大な考え方、豊富な中国大陸でのご経験、物を見、事を見る目の確かさ、慈悲のこもつた眼の底に鋭く光るものを感じ、この方のためなら何でも甘んじて受けられる、という確信を得ていたからである。

私は水呑百姓の長男に生まれ、貧苦と家族の病氣などで、三十歳までさいなまされ続けて来た。だが少年時代に勉強がいやになり、六年生の卒業写真をうつした翌日あたりから、学校はやめてしまった。講談本や忍術本が大好きで、尋常三年から五年まで

の間に、当時出版されたものは全部読んだといつてよい。貸本屋にある俠客ものや里見八犬伝の和本などもみんな読んでしまい、小学校五年の夏には変体かなも全部暗記してしまった。

幾多の職業を転々として、不景気のさ中に一家を支え、十人の家族を養ってきたが、その中でいろんな諸先生の益を受け、学問別に一人づつ師ときめた先生から、王道政治の根本である儒教、宗旨を抜きにした仏教、詩文と若干の国学などを学び、だんだん利己主義に陥っていく世の有様と、規模が小さくなってゆく政治家などに対しては、常に不満を持っていたが、梅暁老師に接してから、心は自ずと平らかになり、特に平沼家で預っていた老師の書籍から玩具まで拝見させてもらい、真の人物とはこの様な人かと瞠目し、敬仰することになった。

奥様から老師と平沼家との関係も伺い、この様なコンビが組めることは、平沼家歴代の遺徳と、それを受け継いだ御夫妻の、求道の賜物であろうかと思つたのである。

桐江先生は埼玉銀行の頭取として、合併した銀行内部の不統一から来る危機を切り抜け、これをしつかりしたものにしなければならぬという、強い責任感使命感を持ち、日夜活動しても時間が足りない筈である。

それなのに参議院議員としても重大な責務があるどちらもあの時代としては困難極まるもので、一つだけでも胃潰瘍を起したり、脳溢血を起すほどの悩みを抱えている。それにも負けず最善を尽し、帰宅すれば早々に粘土をこね、ノミを振う、いかにこれに熱中しているとは言え、鬼神ではない。或は倒れる危険があるのではありませんか、と奥様と邦彦様の前で申し上げたことがあった。

だがそれは杞憂だった。

議員の任期も終り、武州鉄道事件も結着がつき、幾多の苦い経験を履んで、よくそれを切り抜けて来られたものだと、私は感嘆の声を挙げた。

先生の公職から解放されてからは、普通政治家

や経済人なら、頭の中が空っぽになり、退屈の爲めに阿呆ではないかという様になるのが定石なのに反し、そのファイトは倍加した。

今度は鳥居観音に心を打ちこめる、その喜びであるうか、益々生々潑刺としてきた。本堂建立以後の努力精進ぶりは眼を見張るものがあり、日を逐い月を重ねて、境内の建造物や仏像の数は増加し、どの一つをとってみても、その時の最善を尽してないものはない。

インドに飛び、セイロンに跨り、シルクロードからエジプトの方面、イラン、イラクの古代遺跡を探訪し、これを各種各様に取入れて生かしている。

極端に言うると一見して悪趣味かと思われるものもあるが、熟視すると違ってくる。完全に自分のものになるまでこなして表現している。先生自身から見れば、まだ不十分な点は幾多残っているかも知れない。而しこの仕事は形式だけではなく、それに打込んだ心の問題なので、これを見る明のある人はわかる筈である。

多くの協力者の力も加っており、信仰深い人々の喜捨もあって鐘楼も見事に出来上り、魚籃観音の碑奥様写経の筆塚も出来たが、鐘楼落慶式の当日、記念品の中へ入れて差上げた桐江先生の肉筆の達磨は一種の異彩を放つ貴重品である。

彫刻をやる人の画は立体感に富んでいる。例えば一体の仏像を作ろうとする場合、その横からの形も後ろからの姿も、常に重大な意味を持ち、正面だけうまく出来ても、横や後ろで壊してしまう恐れが多分にある。

その為であるうか、一枚の色紙に仏頭を書く場合でも、頭の背後まで、考えなくても考慮されている私は名栗の平沼家で、沢田政広先生と幾日か過した折、先生が画く観音をみていて、それが何れも立体的なのに驚いた。

爾来彫刻家の彫刻と、その書かれた画を見る毎にこの点には常に注目してきたのである。

桐江先生が達磨を書き初められた頃、私はその賛

に使う文字をえらび、その雛型を示したが、その達磨の立体感あるのを見逃してはいない。

その後先生は高血圧で倒れられ、言語も半身も不自由で、練馬病院や伊豆熱川の温泉病院で療養されすべて元通りに快復されると、又もや鐘楼建設に全力をあげ、一方達磨の画く数も多くなつた。恐らく何千枚という数をお書きになつたと思われるが、その中には現代人に似ている顔もあれば、インド人、中国人の禅僧に似た顔もあつた。

だが今でも尚画き続けておられるが、その筆致はいよいよ冴えてきており、且つ渋い味も深くなつてゐる。

又初め私の書いた賛の文字を、どの様に真似て生かすかについて、かなり工夫されたと推察するが、鐘楼落慶式より二三ヶ月前の作品を拝見すると、すっかり渋の抜けた柿の様に甘露甘露といいたいほどの味が出ていた。

これには些か私は驚いた。渋皮がむけたのである。

捉われない境地に立つたのである。期待せずして自分の本領が出てきたのであつて、文字に多少の間違ひがあるのでも、一つの威厳を持ち初めた。

仏像と同じ様な俗から縁を切つた美しさがおのずと出てきたのである。

失礼な言い方だが、書は私が師である。その師が未だ至らぬものが随処に顔を出して、私は教えられる所があり、時には未熟さを恥しくなることがある。これは過褒ではなく又お世辞でもない。

そういう境地に到達されているのであつて、ご自分とそれとは気づかぬところに、その価値は大きいと見てよい。

私は通仏教という様なあいまいな信しか持つていないが、曾て知命の年に、白隠禅師の夜船閑話による養生法を實行し、幻覚ではあるがほとけを見た。その時私の宿痾であつた心臓が止つてしまい、脈もなくなつて、仮死状態になる病氣は、一瞬にして吹き飛んでしまつた経験を持つてゐる。

それ故に、私のあこがれの書の境地は、更に高くなり、勉強とは心を磨くことであり、書とは本来の自己を顕現することであると、驚馬に鞭打ち、日曜も祭日も無く、夜も日もなく努めている。而し道は遙けく遠い。たくさんの私の作が鳥居観音に残されているが、これは何れも途上のものであって、いかに心をこめたとは言え、今から見れば皆恥しいものばかりであるが、桐江先生の書には逆に教えられるものが尠からずあることを白状しなければならぬ。

私の村（今は清水市）には、学問の伝統がある。書の伝統もある。荻生徂徠系の学者山梨稻川が逝去してから、昭和五十二年で百五十年になる。その祭典を行った際、私は伴に全部陳列した作を写真に収めさせ、これを盧原先賢遺墨展集として本にまとめたが、この中で稻川は日本第一流の詩人と称された人であるが、其学問は徂徠派の（護園派）正統を継ぎ、別の後漢許慎の著、説文解字から古代の音韻学を研究し、その大著の原稿を江戸で出版すべく出版して、遂に果さず、空しく桐ヶ谷一片の煙と化した

人である。

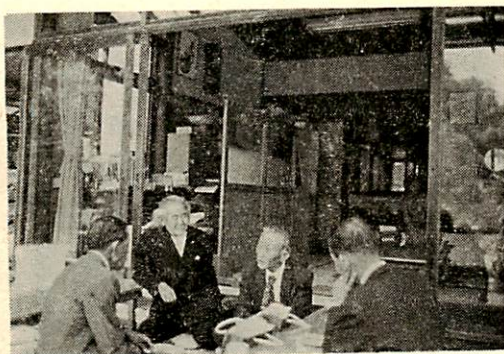
又稻川が青年時代特に私淑した師は、柴田慈溪号を柴隠居という篤学の君子で、この人の作も稻川と同格といつてよい。

即ち徂徠から出発した、在野漢学の正統的なものが私の村の中に伝えられ、山梨家柴田家からは多くの碩学を出している。

この庵原の地と名栗とを結縁させてくれた恩人は、水野梅曉老師であつて、私は晩年の老師しか知らないもので、その編纂した「水野梅曉追懐録」も不備そのもので、まことに慚愧に堪えない。而しそんな本でも国会図書館初め、全国の有名図書館には納入され、五十二年三月台湾へ行った折には、何応銀、姚琮、朱玖瑩の諸名士や、文化学院大学等にも寄贈したところ、意想外に喜ばれた。追懐録の中には、名栗との関係も詳述されているので、日本語のわかる知名の老政治家、学者は皆読んで下さったらしく礼状も感想も寄せられた。

桐江先生の延命十句観音経は、是又超俗のもので

今二幅表装してみて、達磨の賛以上のものがあるのを発見した。
それでこの文を書く気になったことを付記しておく。



「延命十句観音經
や写経等について
話題がひろがって
行く、庫裡の広間
の一時」

松田江畔先生

松田先生同行の人

平沼桐江先生

松田先生同行の人



西遊記

(其の三四)
岡部千三

げんこつの仕合 前号につづく

独角大王は、白い輪をとりだした。それを見た悟空は、「これはいかん。白い輪は、にがてだ。」

さっさと、山の上にひきあげていった。あとにのこされた小猿どもは、白い輪にすいこまれ、門内へつれていかれてしまった。

悟空たちはしかたなく、山の上で、いくさのそうだんをやりなおした。

「なんといつても、あの白い輪を、こちらへとつてしまわないことにはどうしようもない」

「それはわかるが、それがむずかしいことだ」

「いや、それには、たった一つ方法がある。かんとんな方法だ。つまり、ぬすむことさ。」

「ぬすむだって。」

みんな、悟空の顔を見て、くすくすと笑った。

「なるほど、ぬすみの名人がここにいる。仙丹をぬすんだり、ばん桃園の桃の実をごまかしたりしたぬすみの名人がね。」

「へんなことをいっこなし。まあ、見ていてもらいましょう。」

悟空は、いつの間にか、はえになり、ぶーんと、門の中へとびこんでいった。それと気がつかぬ大王の手下が、あちらにうようよ、こちらにまごまごしているのを見ると、悟空は、ついてもちまえのいたずらをしてみたくなくて、体をゆすってあなぐまになると、てしたどもにかみつぎ、つぎにはほんとうのすがたになり、げんこつをふるって、ばかりばかりとなぐりつけた。

「わあ、悟空がやってきた。」と、てしたどもはにげまわった。

ざわめく声をきいた大王が槍を持ってうちかかってきたが、勝負がつかないうちに日がくれて、あたりはまっくらになった。

「悟空、勝負はあすのことにしよう。」

「いいとも。きょうはゆるしてやる。」

にくまれ口をきいて、わかれた。しかし、悟空はかんがえた。

「大王め、つかれてぐっすりねているだろう。そのすきに、まほうの白い輪をとりあげてしまえば、あしたの勝負がらくになる。よしよし、それにかぎる。」

悟空は、こおろぎになって、びんぴんと門内へはいっていった。

「いるな。やっぱりぐうぐうねむっている。」

独角大王のねているそばへ、びよいとねていった。そして、大王のうでから白い輪をぬきとろうとしたが、きっちりくっついていて、なかなかとれないのである。

白い輪をとることをあきらめた悟空があたりを見まわすと、山のように武器が積みあげてあった。

そこにはすいとられた如意棒がおいてある。

なだ太子や、火徳星の武器もあった。

「とても、ひとりでは持てない。」と、悟空は、一人ごとをいって、いつものように毛をむしりとりおおぜいの小ざるをつくった。

「おまえたち、武器をもって、さきにもどれ。わしは大王めにひとあわふかせて、あとからいく。」

悟空は火竜をよんで火をふきださせると、おおいそぎで太子たちのまっている山へもどった。

火のもえる音と、火のあつさに、独角大王は、ようやく目をさました。

「悟空のしわざだな。手下ども、早く火をけせ、法師は、しばられたままぐったりしていた。」

「悟空めにも、法師は見つからなかったな。あしたは悟空を、このようにしてやるのだ。」

大王はかんかんにおこって、夜のあけるのをまっていた。

老君と青牛

あくる日も、大王と悟空のたたかいがおこなわれた。そして、もうすこしというところでせめつけたが、大王が白い輪を持ち出すと、どうしても勝つこ

とができない。

「ぞんねんだが、われわれの力では、独角大王をやつつけることはできない」

さすがのたくとうり天王も、ためいきまじりにいつて、うでをくみ、うなだれてしまった。

悟空は、くやしくてたまらない。

「といって、おししょうさまを怪物のいいようにはさせられない。あなたまでがそんな気のよわいことをいわれるなら、お釈迦さまにおめにかかって、お力を借りることにしましょう。独角大王がなにものであるかしらべていただければ、いくさのしようもわかるでしょう」

「よいところへ気がついた。わたしもいこう」

たくとうり天王もまだ太子も、悟空のかんがえにさんせいをした。お釈迦さまは、いつものとおり、靈山の大雷音寺というお寺におられた。

「おお、悟空、なにをしにまいった」

お釈迦様は、おだやかな声で、とがめた。

(以下次号)



田舎医者 (其の二十一) 見川鯛山

「あ痛っ!!」

悲鳴をあげたのは蛭田桑吉の方だった。お坊様がふりまわした釣り糸が偶然にも桑吉の鯰を引つけたのだ。思わぬ叫び声と重い手ごたえに、お坊様がふり向いてみると、狐師のひげを生やしたひょうきんな恰好のものは、頭の皮に深々と針を打ちこまれ顔面神経痛みたいに顔を引っ吊りあげて、困り果てた人相だった。

これぞ御仏の加護!! とっさにお坊様はそう思い釣り竿をピンと手もとへ引いた。

「痛テテ!! その竿をはなせ、これ、引っばるなてば!!」

叫びつつ桑吉は盗っ人の顔を見た。

「おお!! おめえは寺の坊様だな」

「その通り、私は半俵の坊主だ。あんたは私を、ヤスで殺そうとした。坊主殺せば七代たたるだぞ、恐ろしい人だあんたは!!」

「俺ア殺す気なんかなかったぞ、ヤス投げてびっくりさせっぺと思っただけだ」

「いいやうそだ!! あんたは坊主を殺そうとした泥棒だといった、勘弁ならん!!」

と、お坊様はますます竿を引っ張るのだった。

「痛え!! 一寸ゆるめてくれ、頼むだからその竿はなしてくれ、俺アわびてもいいだ」

「私をもう盗っ人と云わないか?」

「いわない、もういわねえだ俺ア。だけど魚は俺のもんだ、返してくれ」

「いいや違う。あんたは魚に逃げられた、つかま

えたのは私だ、この鱒は当然わたしんだ」

狐師が怒鳴った。するとお坊様が竿を引つ張る、

「ううっ!! こら、その手をゆるめろ」

「駄目だ。あなたはまた盗っ人といった」

「もういわねえ。おめえは盗っ人じゃねえ、だから

らはア、その竿をはなしてくれ」

「よし、話が分れば許してやる。私は僧侶だ、

争いは嫌だ。だがこの鱒は私のだ。私が掴えなければ

鱒は海まで流れて行く、だからあくまで私んだ」

「そんだったらおめえ、なんで逃げ出しただ」

「なんとなくだ。あんたが怒って追うからだ。そ

の大きいヤス持って私を追いまわすからだ。ほんと

に、おそろしい人だあんたは」

と、お坊様は畦につきささった三又ヤスを見なが

らブルブルつとふるえ、さっきまでの苦しい逃亡を

想い出して口惜しがり、再びピーンと釣り糸を引っ

張った。

「お、分ったてば!! もう勘弁だ、俺ア何もいわ

ねえ、魚も半分やる」

「半分?」

「ああ半分だ、掴えたなアおめえだが、突いたの

は俺だ。だから半分だけだ」

「ふん、半分か……」

お坊様は不服そうだった。

「さあそんでいいべ? だから針はずせ、その

竿を地面さ下ろせ」

「ほんとに半分よこすか? 針はずしたら、あ

んた私の魚を取り返えして、私を盗っ人だというん

でないのか、どうだ?」

と、お坊様はもう一度念を押して、竿を引つ張る

のだ。

「あれ、そうすんなってば!! そうされつと俺、

気が遠くなるくれえ痛えた。俺アもうほんとに何も

わる口いわねえ、魚だつてほんとに半分でいいだ」

泣き声で狐師がいったが、お坊様は用心深かった

手に持った釣り竿をほんの一寸だけ弛めただけで、

相手の顔色を見ていた。

「な、本当だべ。おめえがそうして糸をゆるめた

つて、俺アもう何もいわねえべ、俺アうそつきでねえだ」

「仏に誓って、魚は半分よこすだぞ、いいな!!」

「俺ア仏様にでも誓うだ。だからこの針はずしてくれ、見てみる俺のここん所、こうだに赤くはれちまって……」

泣き顔でうつ向き、糸吉が痛々しい彼の倅を両手で抱いた。

「よろしい、勘弁してやりますタ」

お坊様はようやく釣り竿を地面に置いた。糸吉は大きなあくらをかいて草むらに坐り、背中を折り曲げ、懸命に針を抜こうとした。だが彼の息子は、打ちおれた父親にひきかえ、河豚ふぐのようにふくれっ面で怒り狂い、怒噴したそのツラの皮を鋭く山女魚針が貫き、アギが逆に刺さって抜けないのだった。

「不器用な人だあんたは、どれ、拙僧が手伝おうこういうことは釣師の方が上手ですタ」

見かねたお坊様が糸吉のあくらの中にチョコンと坐って手を貸した。

「ここをこうしましてな、それからこれを、こうしますタ。そうすればあなた……やっぱりこれでは抜けないですタ。それならば、今度はこれを、引っ張って……」

「痛っ!! そっとやれそっと、他人のものだと思つて乱ぼうすんな!!」

糸吉が怒鳴りつけた。

釣り針は抜けなかった。名僧の知恵も、器用な釣師の指を以てしても、針は蛭田糸吉の性器をいたずらに痛めつけるだけだった。

炎天の草むらではキリギリスが啼きつづけ、その草いきれの中で、裸の大男と中学生の服を着たお坊様とが永い間うずくまり、二人とも困りはてていた。「医者」さ行くべ。

とうとう被害者がねをあげていった。

そして、お坊様はおもしろも浮子もつけたまま、糸を釣り竿からはずし、糸吉の方の竿にクルクルクル巻きつけたのだ。

一部始終を私に聞かせて気も晴々した坊様だった。



謹賀新年

皇紀二六三八年
西紀一九七八年

(敬称略)

開	祖	平沼弥太郎	護持会役員	会津	政雄	護持会役員	吉田仙太郎	越生講中	小森	茂
同		平沼	同	梶谷	真一	講	中	東京福徴講	成瀬講中	畑
代表役員		岡部	同	若林	とく	埼玉トヨベ 講中	梶谷	真一	坂戸講中	若松
責任役員		尾尻	同	小峰	久治	川口講中	飯塚	孝司	大山講中	榎本みや子
同		有馬	同	井上	竹吉	千ヶ瀬講中	荒井	多一	目黒講中	若林
同		町田真之亮	同	斉藤	新作	五日市講中	鈴木	嘉三	川越講中	原田
同		平沼	同	小山権之丞	青梅講中	宮沢庚子生	荒井	もと	新友講中	斉藤
監	事	武居	同	水上	清	大柳講中	粕谷	とし	秩父講中	松本忠太郎
同		平沼	同	町田仲太郎	枝久保鶴四郎	豊岡講中	上畑講中	野口	定吉	加須講中
護持会々長		飯塚	同	孝司	同	狭山講中	井上	竹吉	宇和野拓植	清

株式会社三信工業

篤信者 社長 服部 雄次

富士倉庫運輸株式会社

同 社長 高木 菊蔵

武州商事株式会社

同 社長 矢島 武久

大栄不動産株式会社

同 社長 桐木 光三

觀世音セクター株式会社

同 社長 平沼 宏之

埼玉トヨペット株式会社

同 社長 平沼 康彦

鳥居觀光株式会社

同 社長 平沼 宏之

武州印刷株式会社

同 社長 藤沢 帝

廣瀬電機株式会社

同 社長 廣瀬 秀雄

同 東京 渡辺 綱雄

同 東京 竹村 吉右エ門

同 清水市 松田 江畔

篤信者 川越 山崎 嘉七

同 飯能 小川 文雄

同 東京 江端 政吉

同 東京 江崎 元堂

同 東京 滝田 トキ

同 東京 本村 その

同 東京 穴戸 睦子

同 大和拓友会長 喜作

同 黒田 博

同 名栗 平沼 清儀

同 飯能 島崎 石材店

八王子 洗心 講中 内田 菊代

飯能 講中 武居 藤吉

不二サッシ 講中 佐野 友二

片倉チッカ リン 講中 大村 潔

同和 講中 井上 正雄

觀世音セクター 講中 竹井 定雄

所沢 觀音 講中 小山 權之丞

名栗 岡部 安一

野本 榮治

岡部 敏

岡部 仲次郎

矢島 武一

名栗 吉田 仙太郎

佐野 正助

平沼 幸一

淺見 光雄

松下 愛吉

淺見 富蔵

淺見 寅雄

町田 仲太郎

町田 要一

片山 武夫

岡部 博吉

名栗 梅花 流

鳥居観音だより

終った行事

八月十六日、盆の行事が終って数日して、ようやく天気も快復して、残暑がぶり返した。

八月二十一日、夏休みでも日曜は特に家族連れの人山でにぎわった。水と空気がうまいと云っていた。

八月二十八日、拓友会黒田会長外十五名来山、奉納植樹について、庫裡にて会議があった。

夏休み最後の日曜、子供会等のグループでにぎわった。久しぶりに太陽が見えた。

八月三十日、青梅市大柳講元荒井もと様一行来山
八月三十一日、平沼先生ご夫妻来山、救世大観音

参拝かたがた、山で久方ぶりに昼食をとられた。

九月二日、志木市、浦和市からの参拝、バス二台

九月五日、津軽賽の河原地蔵尊開発、救世観音、

分院の委員長、工藤儀一郎氏来山

九月十五日、敬老の日、参拝者でにぎわう。

篤信者小川文雄先生、堀沢幸正、滝田トキ、下田龍治の諸氏来山

九月十六日、平沼先生ご夫妻、服部雄次様来山

九月二十日、秋晴の好天気、若林とく様、外から

写経折本申し込あり、五十巻発送す。

九月二十一日、彼岸となり参拝多し、折本五十巻
壱万體観音十五体奉納修行す。



毎月納経供養する写経塔
現在 8,600 巻が納経

九月二十三日、秋分の日、午後一時より彼岸法要

九月二十五日、平沼先生ご夫妻来山、団体入山、境内の山萩、すすき等も秋の風情を添えてきた。

九月二十七日、観光三台で来山、山内にぎわう。

九月二十八日、老人クラブの団体入山

十月一日、朝から参拝客多し

十月五日、新座市小学校児童来山 一九八名

石神井団体来山 一六八名

十月八日、野辺長寿会外二団体来山、静かなよい所と大変よろこばれた。

十月十日、マイカーの入山と、一般参拝多し

十月十一日、自衛隊の入山と、一般参拝あり

十月十六日、マイカー入山一六五台と一般入山、

二二五名、白雲山の自然に親しむ人が多くなつた

十月十八日、老人クラブの二団と一般来山あり。

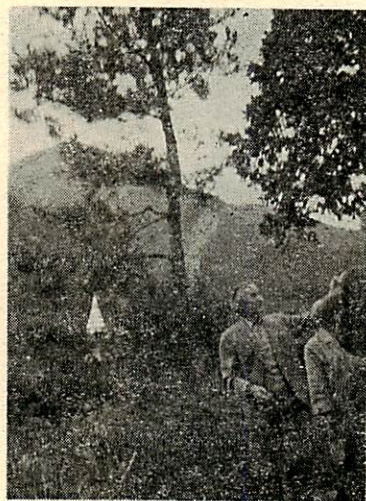
山内の紅葉もはじまる。壱万体检音、受付五体

十月二十二日、平沼先生ご夫妻来山、山内巡拝、一般の来山とマイカー多くなる。

十月二十三日、紅葉の探勝者多し

今年の紅葉は、例年より大変におくれた。山上のものが色づき始めたくらいである。

紅葉もその年の天候や気温によつてちがうようだ



山の状況をながめられる
平沼先生

平沼先生のお話では、この楓を植えた頃は、毎年雑草や悪木を除去して、肥料も施し、その成育を促したものだ、その甲斐があつて、樹令も成木に近くなつたのや、これから特性を発揮する樹もあつてこれからがたのしみだと云つておられた。

十月二十五日、府中の落合様外四十名来山、その

他マイクロで二十八名来山、其の他来山多く山内もにぎわった。

十月二十七日、鴻巣より一行四十八名来山、写経壱万體観音の申し込あり。一般参拝も多し、

十月二十八日、観光バス一台と一般参拝多し、マイカーの来山も多し。



(紅葉を探勝した中学生)

パーセントと云ったところである。

山の秋はいよいよこれからという感じだ。

十一月一日、秋季例法要の準備にかかる。

日毎に紅葉の探勝客多くなる。

十一月五日、入間市金子小学校児童一五〇名入山
十一月六日、大和拓友会慰霊祭十一時、現地で行式の前に、椿苗五十本の奉納の記念植樹が関口会長によってなされ、慰霊、一同焼香後庫裡で、懇親

会開催四時散会。参拝者多数で山内にぎわう。

十月三十日、家族の来山もあり
中学生のグループも入山した。徒歩入山が多し、マイカーも多し、
紅葉は三〇

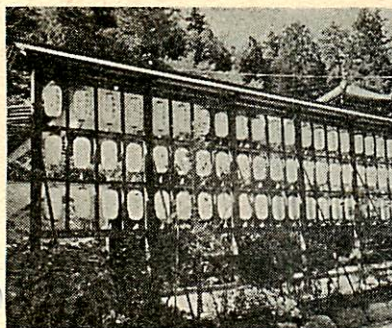
十一月九日、練馬区の老人クラブ保田会長の引卒
十一月十七日、秋季例法要、天気予報は昨夜から

大雨注意報が出ていた通り、朝も大降りだった。関係者はこの悪天候に心を痛めた。しかし晴雨にかかわらず執行の予定なので、気持は変っていない。

九時頃になると空は明るくなり、雨も小止みになって来た。これ天の助けと一同空を仰いでよろこんだ、十時三十分開始の頃には雨は止んだ。

参拝の方々もぞくぞくお着きになって、本堂内は
一ぱいとなった。

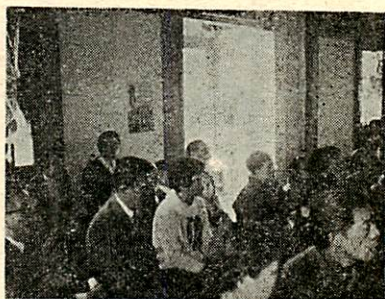
導師は尾尻老師、随喜として有馬、鈴木両老師に



(本堂入口の提灯)

平沼先生ご夫妻のご臨席を始め、来賓各位、多数のご参列を賜って、ご焼香をされる時、開眼された。三十三観音はいよいよかがやき、参拝者一同感激し

よって修行さる。詠歌は名栗村の婦人梅花流によって式前、式後奉詠され、おごそかそのものだった。ご参列の方々は、日本海上火災保険埼玉支社長外七名、埼玉トヨペット㈱から十名、浦和講から五十名観光バスで来山、護持会役員、世話人の方々多数の参列で二百名に及んだ。十一時三十分から、救世大観音堂内の法要と、次いで、この度三十三観音(平沼桐江先生作)奉納の開眼供養も行われた。



(本堂法要の参列者)

ろげた。十一月二十日、紅葉探勝と参拝者で白雲山はにぎわった。いつもならもう半分は散っている紅葉なのに、今年は真盛りというので、毎日にぎわった。東京の江端さんの一行十名も千社札を貼り乍ら、午後来山され、紅葉をゆくり探勝された。十一月二十三日、勤労感謝の日で、来山者多数、村内の老人クラブも団体で列をなし、徒歩で探勝、近くにこんな美しい処があることによるこびと、ほ

乍ら、口口に名物が又殖えたと云われていた。雨はその頃上がつて、折からの紅葉が、雲間を照れる太陽にかがやいてきた。紅葉は真盛りのいろどりをくりひ

こりをもっていた。

十一月二十七日、最後の紅葉日和、来山客は口口にきれいだ、きれいだと参拝しながら遊歩されて、夕刻まで探勝して、名残おしそうだった。

十二月十日、十一時大黒祭修行、大黒殿へ入山、殿内で尾尻老師大黒祭修行、関係者、一般列席す。

十二月三十一日、大鐘樓の除夜の鐘、落慶初の除夜の鐘の行事は、午後十一時三十分関係者が楼内に集り、観音経読経、区切に合わせて、鐘をつき、十二時三十分には、百八の鐘も読経も終了した。同時に新年の言葉を交わし解散した。

○新年の行事

一月一日、新年元旦祈禱会、十時、本堂。

講中役員のお骨折と、一般の御申し込みによって毎年祈禱札も増加し、寺務局は張り切って行事の執行に当った。当日は参拝受札の方々には庫裡にて、供酒をもてなし、おせち料理と雑煮等で、接待す。

続いて二日、三日と祈禱は執行した。

○春の行事と花のお知らせ

二月三日、節分会、豆撒き修行、午後三時、福豆の袋入を供え、法会修行後、豆を撒く、来山者には福豆をさし上げます。お待ちしています。

二月十五日、釈尊涅槃会、十一時修行します。

三月二十日、梅まつり始まる。

三月二十一日春分の日、彼岸法要、午後一時

四月一日、つつじまつり、さくらまつり開始。

四月十七日、午前十一時、三蔵法師法要。

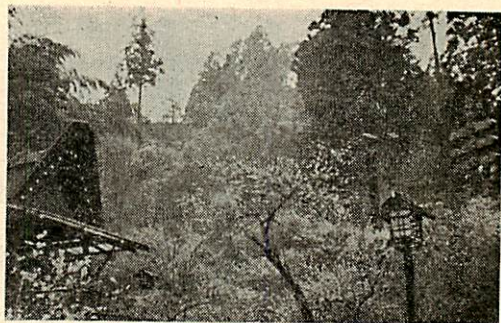
五月十七日、春季例法要、十時三十分。

本堂へ救世大観音。

花の見頃

梅、三月二十日頃から境内の入口、庫裡の前庭に咲き始め、四月中頃まで咲きます。

三ツ葉つづじ、四月初旬からむらさきの花が咲き始め、四月下旬まで咲いています。当山ではこの花が春にさきがけて、数千株が、咲きますので、全山が絵巻を展開します。



(梅、さくら、つつじの花の白雲郷)

梅とさくらと、つつじと織りなして、訪ずれる人々の目をうつとりさせます。五月となると、紅のつつじが、むらさきつつじのあとにつづいて咲き出します。まるで紅の絵巻という感じです。やわらかくもえ出した、木木の芽のうすみどりと、萌黄いろとが、おりなして、山の春は年間を通じて、たのしくなります。

白雲山内の探勝はいつも午前九時から午後四時三十分まで開園しております。

どうぞ春の花……花……花をご探勝下さい。

新春雑詠 岡部千昭

馬頭尊 馬上に座せる 絵馬飾る
元旦の 祈禱読経に 威儀正す
梅一枝 咲かせた鉢や 名刺受
未明から 砂利ふむ音や 初詣
鐘つくや 余韻の闇に 去年 今年
除夜の鐘 鐘つき終えて おめでとう
初詣 客に馳走の 雑煮かな
みくじ引く 娘の初髪に 香のこもる
念願も 叶いて二人 初詣
初詣 打ち連れ立ちて 一家族
初日うけ 救世観音は 輝きぬ
初詣 三三五五と ひもすがら
マイカーに 輪飾りもして 初詣

とりの 第四十一号 発行日 昭和五十三年一月一日
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三
発行人 浦和市仲町二一八―十五 武州印刷株式会社
印刷所 鳥居観音 電話 〇四二九七―九一〇四一七
発行所 鳥居観音 電話 〇四二九七―九一〇四一七

春の行事

- 新春祈禱 1月1日～3日 10時
- 彼岸法要 3月彼岸中日 13日
- つつじまつり 4月1日～5月31日
みつばつつじから紅つつじと咲き次いで信仰と行楽に最適
- 玄奘三蔵塔法要 4月17日 10時30分
- 春季例法要 5月17日
本堂 10時30分 大観音 11時30分
- あじさいとふじまつり 6月中